

琉球大学学術リポジトリ

物語歌謡における類歌の構造分析について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-06-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 玉城, 政美, Tamaki, Masami メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/547

物語歌謡における類歌の構造分析について

玉城 政美

はじめに

宮古諸島と八重山諸島には物語歌謡とよばれる分野の歌謡群がある。物語歌謡は、庶民の日常生活を反映するの
で支持者が広がり、特定の集落にとどまらず島を越えて支持された。宮古諸島の池間島から八重山諸島の波照間島・
与那国島までの広範囲で、主人公名と筋の類似する歌謡が分布している。ここでは『主人公と筋の類似する歌謡群』
を〈類歌〉とよび、これらと比較・検討して、類歌の実態・諸相を把握する一環としたい。類歌の一系列として、
船の親とよばれる船頭とその妻を登場人物とする、夫婦の離縁をめぐる事件を描いたものがある。(フネノオヤ)
系の類歌は、八重山諸島で八例、宮古諸島で二例、合計十例が確認できている。ここでは、これらの類歌の、どの
部分がどの程度類似または相違しているかということ明らかにしてみたい。そのために、まず作品を個々の事象
に分解した。そして、分解した個々の事象を連鎖の軸と対比の軸に位置づけて、事象の意味を解説することにした。
個々の事象を連鎖の方向で考慮すると、筋全体の流れにおける、当該事象の意味を特定することが可能になる(同
じ事象でも位置が異なれば異なる意味を持つことがある)。次に、各類歌間の類似する事象を比較することで、対
応する事象の意味の共通性と差異性を明らかにすることができる。一見類似する事象でも、連鎖の軸で異なる意味
やニュアンスになっていたり、比較対照の軸で意味の差異が著しいものとなっていたりする。つまり、個々の事象

は、連鎖と対比の双方向から検討しなければ、その意味やニュアンスをとらえがたいことが多いのである。結末部に位置する事象は、とくに重要であり、この部分の差異が主題の差異としてあらわれることが多い。事象の変化は、主題にも影響する。したがって、主題の把握は、同じ系列の中で、ときには系列を越えて比較・検討しなければならないことになる。

類歌は、主人公と筋がおおむね類似するものであるが、口頭による長い伝承期間の経過の中で、地域の伝統的な発想と表現技法が関与して独自のものに変化したり、他の歌謡から影響を受けて部分的に置き換えられたりして、類歌といえどもさまざまの部分・側面で大きな差異を生じていることがある。類歌の実態を把握すると同時に、差異が生じる原因の究明をしなければならないが、とりあえず、同系列の類歌の分析を先行させてみることにしたい。また、類歌を比較することには、もう一つの意義がある。それは、作品の完結性の問題である。ある作品の結末が完結しているのか、あるいは欠落しているのかを判断することが、意外に困難なばあいがある。この問題を解決するために、多くの類歌を比較検討することが重要な前提作業となるであろう。

類歌を分析するために、作品を個々の事象に分解したが、これらの事象は、すべてが等価的な関係にあるのではなく、連鎖の軸の中で価値の軽重、事象間の親疎などがある。事象の価値の軽重・親疎を元にして連鎖の軸を分割してみると、フネノオヤ系の類歌は、一 夫婦の経歴、二 離縁、三 実家での暮らし、四 復縁から構成されていると考えられる。この四つの場面は、それぞれがいくつかの事象連鎖で描かれるので、まず、大きく四場面に分割し、その内部で個々の事象を比較することにする。

フネノオヤ系の類歌に番号を付けて、その伝承地域・出典を示すと次表のようになる。

「フネノオヤの伝承地域と出典」

	地域	出典
類一	八重山・宮良	『南島歌謡大成IV八重山篇』ユンタ117
類二	八重山・白保	『南島歌謡大成IV八重山篇』ユンタ131
類三	八重山・登野城	『登野城村古謡集(第一集)』ユンタ
類四	八重山・波照間	『南島歌謡大成IV八重山篇』ジラバ114
類五	八重山・石垣	『南島歌謡大成IV八重山篇』ユンタ39
類六	八重山・白保	『南島歌謡大成IV八重山篇』ジラバ52
類七	宮古	『南島歌謡大成III宮古篇』アীগ110
類八	宮古	『南島歌謡大成III宮古篇』アীগ75
類九	八重山・大浜	『南島歌謡大成IV八重山篇』ジラバ32
類十	八重山・川平	『南島歌謡大成IV八重山篇』ユンタ11

第一節 夫婦の経歴

夫婦の経歴は、「船の親と私は幼い頃組み合わされた夫婦であつた」と、妻の視点から「許嫁」の関係にあつたことが紹介される。十例中九例が「許嫁」であるとするが、一例（類八）だけ「幼い頃から見染めていた」と夫婦関係ではなく、恋愛関係として描いている。また、許嫁関係とする九例の内部では、関係の成立時期が「幼い頃から（類七以外のすべて）／腹の中にいる頃から（類七）」と微妙に異なるばあいがある。

(1) 幼い頃から許嫁

当事者の意志を別にして、親どうしによって縁組みされた結婚の形態を許嫁と言うが、次の「いみしゃからみゆとぬ／くゆさから うちくぬ（幼い時から夫婦で／小さい時から打ち組の）」が許嫁の関係を示している。「うねぬや」とは「船の親」の意で、船頭をさし、「はぬ」は私の意である。物語歌謡の冒頭では、登場人物のプロフィールが紹介されるのが基本型であるが、この類歌は、船頭である夫と私が幼い頃から許嫁の関係であつたことが、妻の視点から紹介される。

うねのやー（石垣島宮良村）

一 なすなむら うねぬや

はが かぬき ふなぬしどう

んぞさよたら

名石村の字根（船）の親

私のいとしい船船頭

ああ いとしい

うねぬーや

船の親

二 うねぬやーと ばぬとや

船の親とわたしとは

ふなしどとー くーりーとや

船船頭とわたしとは

三 いみしやから みゆとぬ

幼い時から夫婦で

くゆさから うちくぬ

小さい時から打ち組の

(エンタ117)

「いみさ／くゆしや」は幼児期を示しているが、宮古諸島には、許嫁の時期をそれよりも極端に早い時期とする事例がある(類七)。宮古諸島の次の事例のタイトル「お舟の主」は、八重山諸島の「御船の親」と同類で、船頭を意味する語である。「腹のなか居るんから／八重が底居ルんから／だんかーはし置くズめうとばゆ／くゆうあらし置くズめうとばゆ」が許嫁関係を示しているが、その時期は、「腹の中にいるときから／腹の奥底にいるときから」であり、出生以前に親どうしで約束されたものである。

お舟の主があやぐ(宮古)

一 吾が 野崎 生りば しゆ

わが野崎村生まれの主は

どうずん なか すでたル

うりずんの季節に生まれた

二 腹の なか 居るんから

腹の中にいる時から

八重が 底 居ルんから

八重の底(腹)にいる時から

三 だんかーは し置くズ めうとばゆ

約束してあつた夫婦であつた

くゆうあらし し置くズ めうとばゆ

まとめてあつた夫婦であつた

(アীগ110)

(2) 幼い頃から慕っていた相手

許嫁関係ではなく、幼い頃から見染めていた、恋愛関係とする事例が一例ある(類八)。二人の経歴の始まりは、「赤い髪の頃／目や肩が付き始めた頃」であり、物心の付き始めた、幼い頃を示す。この表現パターンは、宮古の抒情歌謡トীগ二の恋歌などでも用いられる。

うーにのうやのアヤグ (宮古)

一 あかばにからジぬ ばだんから

赤い髪(幼い)の頃から

みまゆチギ ばだんから

目眉つく頃から

二 うヴあゆていどう うむゆたイ

お前だと決めておいた

かなしやゆていどう みやんたイ

可愛者だと見込んでおいた

(アীগ75)

類歌(フネノオヤ)系の冒頭は、①幼い頃から許嫁、②幼い頃から慕っていた相手という二つのタイプがある。このような差異があるが、両者とも成長すると離縁される方向に進行する点で同じ筋を辿ることになる。

第二節 離縁

幼い頃から許嫁であつた二人は、適齢期になると実質的な夫婦となるが、その時、夫から離縁を言い渡される事件が起こる。実質的な夫婦に相応しい年齢を「ならふどうぬよーいくだら／たきふどうぬいくだら」「じとうがたきなイたりや／どうむつたぎなイたりや」と描く。「自分の背丈が伸びたら／背丈が人並みになつたら」とか「他の大人並みの背丈になつたら／自活できるほどになつたら」という意味であり、体が大きくなるという形で一人前に成長したことを示す。そして、ここから事件が起こる。実質的な夫婦になると間もなく、夫から離縁を言い渡されるのである。

(1) 離縁の言い渡し

離縁を言い渡すのは、多くのばあい、夫である（類一く類九）。多くの事例では、成長すると妻の私を捨てようとする、と描く。そして、捨てる理由もほとんどの事例で描かれない。次の事例も、捨てる理由について、妻が疑問に思っていることが描かれるだけである。妻は理由も分からないまま、突然離縁されようとしているのである。

五 ばぬゆ なゆで むたら

くりゆ いきやで むたら

六 してなきな してそ

やらなきな なきるそ

私をどうと思つたからか

これ（私）を如何と思つたからか

捨て投げに捨てるよ

遣り投げに投げるよ

(エンタ 39)

(2) 妻の反応

夫による離縁の言い渡しに対して、妻の反応は、「捨てるならそれでもいい、親の家だつてある」というもので、これは一応、反発しながらも、離縁を受け入れることである（類八）には、妻の反応が描かれないが、これは、それ以下が欠落したものと見なすべきであろう。妻の反応は、売り言葉に買い言葉のようなものにみえる。さらに、次のような言葉が追加される事例もある。「実家で芋を積みながらでも暮らせる」（類四・類六）、「実家の座敷で坐りながらも暮らせる」（類五）といったもので、離縁されても実家があるので、生活に困ることはないという。

六 しようば みしや ゆむ みしや

捨ててもよい まあよい

なぐば みしや あて みしや

投げてもよい まあよい

七 うやぬ やーでん ありどる

親の家もある

あぶぬ やーでん ありどる

母親の家もある

(ユンタ117)

(3) 理由の追及

多くの事例で、離縁された理由を問いただそうとする姿勢はあまり見られない。「私のことをどう思ったからなのだろうか（類五）」と、疑問を自分の内心に止めるだけで、夫に尋ねようとはしない。だが、宮古諸島の事例（類七）は、離縁する理由を問いつめることに大きな比重がかけていて、八重山の類歌とは描き方に大きな差異がある。次の事例の引用部分をリライトしてみるとこうなる。妻「あなたは私を捨てるというが、なぜですか」、夫「いやまあ、別に」、妻「家庭の経営のしかたがまずいからですか」、夫「いや、家庭の経営がまずいというわけ

ではない」、妻「私の抱き心地が悪いからですか」、夫「いや、抱き心地が悪いからというわけでもない」。妻の詰問にたいして、夫はそれを否定するだけで、何も答えることのないままである。その後は、八重山の類歌と同様に、「親の家だつてある」といつて反発しながらも受け入れることになる。そして、「母の家は下男が百人もいる」と付け加えて、実家が裕福であることを強調している。これも生活に困ることはないという意味であり、八重山諸島と類似するが、それよりも強調した形となっている。

八 何 みあいがおの親

如何 みあいが 舟世戸

何のつもりでしょうかこの親

いかなる意味でしょうか舟勢頭

九 何 みあい吾 あらん

如何 みあいまい あらん

何のつもりもわたしにはない

いかなる意味もわたしにはない

十 家内持つの みあうたぬ

すうたい持つの むむんまぬ

家庭持ちがへただというつもりではない

主もてなしがへたというわけでもない

十一 家内持つまい ばや あらん

すうたい持つまい ばや あらん

家庭持ちもへたではない

主もてなしもへたではない

十二 寝ヴばだがまぬぬ 無だたぬ

抱きスばだがまぬぬ 無だたる

寝肌心地がないのでしょうか

抱き肌心地がないのでしょうか

十三 寝ヴばだがままい ばや あらん

抱きスばだがままい ばや あらん

寝肌心地もいやではない

抱き肌心地もいやではない

十四 このずがみあ お舟の親

今もお舟の親よ

母家元 ありど 居ルぬ

母の本家はありますか

十五 このずがみあ 舟世戸

今も舟勢頭

親家元 ありど 居ルぬ

親の本家はありますか

十六 うま家や ぎす むむそ

母の家は下男百人

親家元や ぎす むむそ

親の本家は下男百人(がいます)

(アーグ110)

また、宮古のもう一つの類歌(類八)も次のように理由を問いつめている。御盆の据え方・飯台の並べ方、つまり「御膳の上げ下ろしが悪いからなのか」というもので、前の事例と内容はやや異なるが、家庭生活における妻の役割の善悪を問うていて、本質的には同じである。

六 ぶんシキがまぬどう いかんぬよ

盆のものが悪かったのだろうか

だいなみがまぬどう いかんぬよ

飯台のものが悪かったのでしょうか

七 ぶんシキがままい ゆうどうシよ

盆敷きのもも悪くない

だいなみがままい ゆうどうシよ

飯台並べのもも悪くない

(アーグ75)

(4) 離縁の時期

八重山の類歌は、離縁の時期を明確にしないが、宮古の類歌には、離縁の時期について、知る手がかりがある。

実質的夫婦として「婚家に行つて三月を經過した頃、心の染まる頃」に離縁を言い渡されるのである（類七・類八）。二人の夫婦生活が始まつてから三月「いうのは、時間の短さを意味するものであり、ようやく馴染み始めた頃をさす。

四 いき みイチキ なイ ばな

行きて三ヶ月になる頃

キむぬ すん ばなんなよ

心の染めなれるころ

五 きゆう なりば かわいかわイ

今日になつたら気が変わったのか

あつあ なりば ぬギぬギ

明日になつたら気が離れるのか

五 肝の 染むン ばなんな

心染まる頃に

月 三月 なる ばなんな

月三ヶ月になる頃に

六 つきス破うそまい あむンから

突き破れそうな網だから

ばさきル あむンから

破れ切れそうな網だから

七 あつあ なりば ぬきズ ぬきズ

朝になれば離れ離れ

にか なりば んぎ んぎ

夜になれば逃げ逃げ

(ア—グ110)

(5) 離縁を言い渡す主体

離縁を言い渡すのは、多くの事例において、夫であるが、一例だけ「男による追放（類十）」という形のものがある。だが、男から追放された嫁（妻）の反応は、「親の家もある・生まれた所もある」というものであり、多くの類歌と同じである。

六 うふすとうぬ

大舅の

しとうばらぬ

舅の

むぬいぬ

言葉が

七 ばぬゆ ぱり

私を行け

ういばらしで

追い出せと

いゆりば

いうので

八 ばぬや また

私はまた

うやぬ やーでん

親の家も

ありどう うる

あるよ

九 くりや また

これ（私）はまた

まりむとうでん

生まれ元も

ありどう うる

あるよ

(ユンタ11)

(6) 実家へ行く

「親の家だつてある」と言い返した妻が、実家に戻つていく事象を描いたのは一例だけである(類七)。他の事例は、すぐに実家での暮らしに移行する。

十七 うまの家 行居とり

母の家に行つて

親の 家ん ぴやり行き

親の家に走つて行き

十八 お竈口 行かだな

竈口 行かだな

お竈口（勝手口）から行かないで

竈口から行かないで

十九 神とにいかから 遣入りいき

神前から入って

高座敷ん ぴりうとり

高座敷（一番座）に入って行って

（アীগ110）

第三節 実家での暮らし

戻された妻は、①実家の上座で芋を續んでいる、②夫を偲ぶ、③神酒と肴を造る、などの事象連鎖で描かれるのが一般的である。

(1) 芋を續む

実家で芋を續む事象は多くの事例で描かれている（類一・類二・類四・類六・類七・類九・類十）。登野城（類三）と石垣（類五）にはこの事象は描かれない。また、宮古の事例（類八）は、ここ以下の伝承が欠落していると思われる。

機織りは女性の仕事であり、芋を續む（糸を紡ぐ）のもその一環である。実家に戻った妻はその仕事に従事するが、それを行う場所を「上座」とするのは、実家で大事にされているという意味であろうか。実家が裕福だという表現などと関連づけければ、戻されてもそれほど困ることはないという意味を含んでいると考えられる。この段階ま

では、夫に対する反発心は持続しているものと思われる。

九 親ぬ 家ぬ うらざに

親の家の裏座敷に

母が 家ぬ かんざに

母の家の上座に

十 明かる光ば 明からし

明かる火を灯して

とゆる光ば しきとーし

灯火をつけつづけ

十一 なら べらば 前 なし

自分の麻笥を前にして

ゆすぬべら そば なし

四角の麻笥をそばにして

十二 白ぶーむと うみかけ

白い苧麻を紡ぎ

かいぶむと しにかけ

よい苧麻を紡ぎ

(ユンタ131)

苧を績む行為に後続する事象は、①夫のことを思つて苧を績む気になれない(類一・類二・類六)、②夫を偲ぶ(類四・類五・類九)、③衣服を縫う(類七)、④仲人がやってくる、などである。①と②は夫のことを思う点で共通するので、以下の行為も一致するが、③や④とは異なる筋を構成することになる。その後の筋は、次の三つのタイプに分かれる。

A 夫を偲ぶ↓神酒と肴を造る↓夫を訪問する

B 衣服を縫う↓誰に着せて夫にしようかと泣く

C 仲人がやってくる↓仲裁を拒否する↓親が説得する

Aの筋の流れは、フネノオヤ系に独自のものであるが、BとCの二つは、ンザトーラ系と関連する流れである。

(2) 夫を偲ぶ

実家で夫を偲ぶ妻の心情のニュアンスとその表現には、次の三つのタイプがある。

A 芋を績みながらも夫を偲んでその気になれない(類一・類二・類五)。

B ウリズン・若夏の季節になると夫を偲ぶ(類一・類四・類九)

C 夏の水は夜になれば忘れられるが、船の親は忘れられない(類四)

A 芋を績みながらも夫を偲んでその気になれない(類一・類二・類五)

実家で芋を績む暮らしを続けていたが、やがて夫のことが偲ばれて、妻は芋を績む仕事にも身が入らなくなる。そして、神酒と肴を準備する。これで夫を持って成したいのである。

十二 白ぶーむと うみかけ

かいぶむと しにかげ

十三 うねぬやぬ くと 思ひ

ふなしとぬ 事 思ひ

十四 ぶーむる 肝 ねぬそら

びねる 肝 ねぬそー

白い芋麻を紡ぎ

よい芋麻を紡ぎ

船の親のことを思い

船船頭のことを思い

芋麻を紡ぐ気がないことよ

(芋麻を) 擦る気がないことよ

十五 三日みしば ちくりより

三日神酒を造りなさり

すなはずば まかしより

味噌和え菜を造りなさり

(ユンタ131)

B ウリズン・若夏の季節になると夫を偲ぶ(類一・類四・類九)

旧暦二・三月頃のウリズンや四・五月頃の若夏の季節になると、夫のことを思い出すという事例がある。もし、この季節に必然性があるとすれば、それは、この時期に離島の船が納税品としての反物を石垣島的美崎港に運んでくることと関連するのである。夫が船の親と呼ばれるように船頭であるから、港にやってくるのであり、彼を船迎えて饗応するというもので、状況設定に独自性がある。

十 ばがなちいぬ なりよたら

若夏がなつたら

ばいなちいぬ たちゆたら

南風の夏が立つたら

十一 うにぬやぬ くとうば うむい

船の親の事を思い

ふなしいどうぬ なかば うむい

船船頭との仲を思い

十二 あむるさき まらしょうり

泡盛酒を作りなさり

まいみしゃぐ しくみょうり

米神酒を仕込みなさり

(ジラバ114)

C 夏の水と対比Ⅱ夏の水は夜になれば忘れられるが、船の親は忘れられない(類四)

実家で暮らしているときに、夫のことを偲ぶ事例は、前に示したが、その思いを比喩的に表現した事例がある。

夏の日中の暑さを凌ぐ水と夫にたいする妻の思いを対比した形式である。水は暑さを凌ぐために大切なものであるが、しかしそれは夜になると不要のものとして忘れられる。それに比べると、夫への思いは夜になるとますます募るばかりである、というものである。比喩を用いることで、夫に対する忘れられない思いを強く印象つけていて、表現性にとんでいる。

十一 くま ぶりぬ うむいぬど

ここに座つての思いが

ぶりさましぬ しむいぬど

お座り(になつて)のつもりが

十二 夏ぬ 水 ふしやよ

夏の水欲しさは

夜 なりば わすりど しい

夜になると忘れるよ

十三 うにぬやぬ くとやよ

船の親のことは

夜 なりば まさりど しい

夜になると(思いが)勝るよ

(エンタ39)

(3) 神酒と肴を造る

夫のことが忘れられずに、神酒と肴を準備することが描かれる。これで夫を持って成し、関係を修復したいという妻の思いを表現しているのであろう。筋は①芋を績む↓②夫を偲ぶ↓③神酒と肴を造る↓④夫を訪問する、と進行していく(類一・類二・類三・類四・類五・類九)。

九 ちいくい とうりぬ うむいぬ

麻笥を取つての思いは

かいぶむとら かちやみぬ うむいぬ

きれいな芋麻を紡いでの思いは

十 ばがなちいぬ なりよたら

若夏がなったら

ばいなちいぬ たちゆたら

南風の夏が立つたら

十一 うにぬやぬ くとうば うむい

船の親の事を思い

ふなしいどうぬ なかば うむい

船舶頭との仲を思い

十二 あむるざき まらしようり

泡盛酒を作りなさり

まいみしやく しくみようり

米神酒を仕込みなさり

(ジラバ114)

(4) 服を縫う

糸を紡いだ後、それで袴や胴衣などの衣服を縫うことを描いた事例がある(類七)。縫った衣服を誰に着せて夫にしようかと、毎朝、それを持ち上げては泣いている。再婚の意志を表しているが、泣いているのは、それが叶わないことを表現しているのであろう。「ンザトーラとカンヨーラの夫婦」の離縁をめぐる歌謡があり、フネノオヤ系と結末は対照的であるが、前半まではかなり類似した類歌がある。この、ンザトーラ系の類歌でも、衣服を縫って着飾り、再婚相手を求めて探し回るが失敗に終わるものがある。この事例を参照すると、「誰に着せて夫にしよるか」というのは、再婚の意志を表していることが明確になる。フネノオヤ系は、ンザトーラ系と共通する事象を有していて、両者は非常に類似したところが多い。ただし、フネノオヤ系は復縁が成立するが、ンザトーラ系は復縁に失敗するという傾向がある点で、両者は大きな差異がある。

二十 吾が さすき 前 なし

わがサシキを前にして

四角廻り屋 そば なし

サシキを側において

二十一 二十いむンや 續み集み

二十読み糸を續み集め

細物や 續みあつみ

細物糸を續み集めて

二十二 袴 四つ くぬみ織り

袴を四つ企み織つて

胴衣 四つ くぬみ織り

胴衣を四つ企み織つて

二十三 すとむての かずまい

早朝ごとに

明しやるの かずまい

明け方ごとに

二十四 誰んが 着し 夫 為うで

誰が着るか夫にしよう

んじんが 着し そみや すうで

誰が着るか染めやー(夫)にしよう

二十五 すとむての かずまい

早朝ごとに

明しやるの かずまい

明け方ごとに

二十六 むたぎ見いや 泣くズ 泣くズ

持ち上げて見では泣き泣き

ささぎ見いや よむン よむン

差し上げて見では泣き泣き

(アーグ110)

(5) 仲人の仲裁

実家に戻つて暮らしているときに、離縁から間もなく、仲人が仲介にやつてくることを描いた事例がある(類十)。これは、ンザトーラ系には必須の事象であるが、フネノオヤ系には一例だけである。ンザトーラ系からの影響であろう。ンザトーラ系では、仲人の仲裁→妻の拒否→親の受諾と進行する。この事例は、復縁の仲裁を拒否する妻(娘)にたいして、親が復縁するように説得している場面かと思われる。そうだとすれば、以下が欠落した作品と

いうことになり、説得の結果がわからない。「親には逆らえないので承諾する」というパターンがあるにはあるが、類歌ではないのでここに援用してよいかどうか、今のところ判断できない。もし、説得に応じたのなら、他のフネノオヤ系の類歌と共に復縁の成立したタイプとなる。

十二 いきからぬ

むむかやんざん

ならぬけー

行つてからの

百日にも

ならないうちに

十三 ぱりからぬ

やうかやんざん

ならぬけー

行つてからの

八日にも

ならないうちに

十四 くいびとうゆ

なかつすゆ

やらしば

乞い人を

仲立（仲人）を

行かせたら

十五 ばぬや また

んばで ゆむで

いゆりば

私はまた

いやと否と

いったら

十六 うやや また

やふあやふあどう

親はまた

柔柔と

にがようる

十七 うやぬ ふあーや

うやぬ くいん

むちばどう

十八 しゅうぬ ふあーや

しゅうぬ くいん

むちばどう

十九 あとうぬ たみ

すらぬ たみん

あるだーら

願いなさる

親の子は

親の声も

持て（聞け）ば

主（父）の子は

主の声も

持てば

後の為

先（将来）のためも

あるのだよ

（ユンタ11）

第四節 復縁

神酒と肴を準備した妻は、それを持つて夫を訪問する。関係を修復し、復縁するためである。夫のいる婚家を訪ねて、神酒と肴で持て成すが、それを飲食して、夫はおいしいと褒めてくれる。これまでに飲んだことのないほどの、食べたことのないほどの、おいしい神酒と肴だと喜んでくれる。夫の飲食物にたいする評価は、復縁の成立を意味している。

(1) 夫を訪問する

神酒は三日くらいで発酵し、飲み頃になる。それと野菜の和え物を造つて夫を訪問する。夫を訪問する事象を描いた五例のうち、三例は、「神酒を頭にのせて・野菜の和え物を肘にぬいて」と訪問する妻のようすを描いている(類一・類二・類三)。後の二例(類四・類五)は、それを描かず訪問の挨拶に移る。

十八 みいがみすぬ ふき ばな

三日神酒の沸く頃

すないぞうぬ ししいり ばな

菜の味噌和えの味の出る頃

十九 みいがみすや ちぢ かみ

三日神酒は頭に載せ

すないぞうや ぴぢ ぬけ

菜の味噌和えを肘にかけ

二十 うねぬやぬ ねしや いき

船の親のもとに行き

ふなしどぬ かんど いき

船船頭の門口に行き

二十一 うねぬやや や うるんな

船の親は家に居ますか

ふなしどや くま うるんな

船船頭はここに居ますか

二十二 や うらば なゆすで

家に居たらどうすると

くま うらば いきやすで

ここに居たら如何すると

二十三 みいがみしいゆ うやいすんで

三日神酒をさし上げると

すないぞゆ あぎるんで

菜の味噌和えをお上げすると

(ユンタ117)

(2) 饗応する

夫の元に到着した妻は、早速神酒と野菜の和え物をすすめる（類一・類二・類三・類四）。

二十四 うねぬやぬ うらざ いき 船の親の裏座敷に行き

ふなしんどうぬ かんど いき 船船頭の座敷に行き

二十五 みいがみしいや まい なし 三日神酒を前にして

すないぞうや なか なし 菜の味噌和え中にして

二十六 みいがみしいぬ ふき ばな 三日神酒の沸く頃

すないぞうぬ しいり ばな 菜の味噌和えの饅える頃

二十七 みいがみしいゆ うやいしより 三日神酒をお上がりください

すないぞうゆ あがりより 菜の味噌和えをお上がりください

二十八 んまんまと うやいしより うまいうまいとお上がりください

かばかばと あがりより 香ば香ばとお上がりください

(ユンタ117)

(3) 飲食物の評価

神酒と野菜の和え物をすすめられた夫は、それを飲食して、「これまで飲んだことのない神酒だ・食べたことのない野菜の和え物だ」と褒める（類一・類二・類三・類四）。神酒と野菜の和え物にたいする、この最大級の評価は、それを造った妻にたいする評価でもあり、夫の復縁を承諾する意志表示でもあるだろう。

十七 うにぬやぬ ふなむかい

宇根の親の船迎へ

ふなじどうぬ みちいむかい

船船頭の路迎へ(のため)

十八 あむるざぎん むちる ける

泡盛酒も持つて来た

まいみしゃぐん しいだしどう ける

米神酒も造つて来た

十九 ぬみて みらぬ あむるざぎ

飲んでごらんよ 泡盛酒

ぬみて みらぬ まいみしゃぐ

飲んでごらんよ 米の神酒

二十 あむるざぎぬ かていむぬ

泡盛酒の肴は

たくぬ びち かていむぬ

乾蛸の削り物が肴(である)

二十一 まいみしゃぐぬ かていむぬ

米神酒の肴は

あいなずぬ かていむぬ

(味噌の)和物が肴(である)

二十二 かみてい みらぬ たくぬ びちい

食べてごらんよ乾蛸の削り物を

はいてい みらぬ あいなず

食べてごらんよ(味噌の)和物を

(ジラバ114)

(4) 復縁を示唆する言葉

神酒と野菜の和え物にたいする、おいしいという評価だけではなく、「元の人よ、元の人、今日の日を待つていたのだ」いうセリフの付加した事例がある(類三)。次の事例の『登野城村古謡集(第一集)』では、「むとうぬしいどう」を「元の船頭が」としているが、「もとのす(元の人)」は、歌謡の多くの用例で別れた「前妻」にたいして使用することが多いので、このセリフは、持て成しを受けた船の親のセリフとみたほうがよいであろう。離縁を言

い渡した夫がそれを撤回し、復縁を承諾したことになり、妻のセリフとみるより、そのほうが神酒と野菜の和え物に対する評価と直結していて、より完結性が増す。

十三 んまんまとう おいしよーり

かばかばとう んきよーり

十四 みーかみしいぬ んまさや

すないずーぬ かばさや

十五 むとうぬしいどう むとうぬしい

きゆぬ びいーどう まつだる

うまうまとお上がりくたさい

香ば香ばと召上がりなさい

三日神酒のうまさは

味噌和え菜の香ばしさは

元の船頭が もとの主

今日の日を待っていた

(「登野城村古謡集(第一集)」)

(5) 訪問する場所

妻が訪問する場所は、夫の家またはその裏座というのが、一般的であるが、船宿とする事例が一例だけある(類四)。船旅から美崎港に帰ってきた船の親を迎える形となる。船迎えという言葉も出てくる。泡盛と神酒で持て成すのは、他と同類であるが、このばあいは、訪問し接待をする状況が他の事例と異なる設定となっている。

十三 みしやぎばま むちやい いき

ふなむとうに ばりやいき

美崎浜へ持つて行き

船元へ走つて行き

十四 とうまやどうりい しいたなが

はまやどうりい 内なが

苦宿りの下に
浜宿りの内に

十五 うにぬやーや くま おるんに

宇根の親はここに居られますか

ふなしどうや なま おるんに

船船頭は今居られますか

十六 ばが ぶりば なゆすでい

私は居るが何するか

くり ぶりば いかすでい

これ△私▽は居るが如何するか

十七 うにぬやぬ ふなむかい

宇根の親の船迎へ

ふなしどうぬ みちいむかい

船船頭の路迎へ(のため)

十八 あむるざぎん むちる ける

泡盛酒も持つて来た

まいみしゃぐん しいだしどう ける

米神酒も造つて来た

(ジラバ 114)

(6) インザトラ系の要素を含む訪問形態

夫を訪問するとき、その通路について描いた事例が一例ある(類九)。この事例は、夫のことを偲んで神酒と肴を造るところまでは、他の事例と一致しているが、夫を訪問する場面から、突然著しく異なったものとなっている。これは、フネノオヤ系とよく似た類歌群であるインザトラ系からの影響を受けたためであろう。インザトラ系は、離縁された妻が実家に戻つて芋を漬んでいる場面までは、フネノオヤ系と酷似している。インザトラ系の筋は、その後「仲人が仲裁に来る↓受け入れる↓婚家へ行く↓夫と後妻が戯れているのを見る↓嫉妬し実家に戻る」というように進行して、結末は復縁の不成立で終わる。ここの婚家へ行く場面か嫉妬し実家に戻る場面で、通路について

の描写がある。また、「湯をかけたモヤシが生えるものか」という、結末の言葉は、復縁の不成立を意味するものであり、この点もンザトーラ系と一致する。フネノオヤ系は、復縁が成立するのが一般的である。

十七 ういぬ みち

ゆばやーだぬ

かゆいみち

十八 なかぬみち

んざとーらぬ

かゆいみち

十九 しいたぬみち

うふにぬやぬ

かゆいみち

二十 ゆー すい

まみなーぬ

むいるんな

上の道は

夜這い人の

通い道

中の道は

愛しい者の

通い道

下の道は

船の親の

通い道

湯をかけた

もやし

生えるものか

(ジラバ 32)

おわりに

フネノオヤ系の結末は、復縁の成立で終わるのが一般的であるが、一例だけ復縁の不成立で終わるものがある（類九）。これはフネノオヤ系と筋の前半が酷似するンザトーラ系の影響を受けたためであろう。類十の「仲人がやってきて仲裁する」事象などもンザトーラ系の影響と考えられる。ただしこの事例は、結末が欠落しているので結果は不明である。結末の変化は大きな意味を持つ。繰り返しになるが、フネノオヤ系とンザトーラ系は、前半部が酷似している。フネノオヤ系は、妻が復縁のために神酒と肴を準備して婚家に出かけるが、ンザトーラ系は、和解のために訪問した仲人の仲裁に応じて婚家に出かける。前者が、復縁のために自らの意志で出かけるのにたいして、後者は、仲人の依頼にしたがって出かける。行為の動機に差異があるが、いずれも婚家を訪問する行為は共通する。（婚家の訪問）の事象を接続点にして、異なる筋の接合が可能になる。復縁の不成立を結末にするフネノオヤ系は、婚家の訪問を接続点にして、復縁の不成立を結末にするンザトーラ系の結末を接合することで、あらたな類歌を生成したことになる。

〔参考文献・資料〕

- 外間守善・新里幸昭『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』（角川書店）
外間守善・宮良安彦『南島歌謡大成Ⅳ八重山篇』（角川書店）
登野城ユンタ保存会『登野城村古謡集（第一集）』